

31

了少

関口次郎

(今から考へると少し可成しいか)

若し港外から大砲でも打ちこまれば直ちに  
 逃げのびる手筈を教へられ、一晩王んぢりと  
 しせお不意な社を造つたこと少し驚かされた  
 何事何事も口シヤ、浦島を却心却心とした西比  
 利亜の混濁物の一部をけではあつたが、  
 それが用ゐられた人の、南東上の唯の対照あつたらしい。  
 戦争の始まりました、三四年前から口シヤ洗の研六の熱  
 が旺盛を極めた、今でもあすしは、肝の看板  
 出ルて、口シヤ洗であるが、生の当分も私達  
 は尋常三年頃から口シヤ洗を習はせられた。  
 学校ではおかつたが、社字には日々可なり  
 少年が来た。とル角それから三年間続  
 けて、幼い三才が私達私達と通通たことを見えてお  
 ので、その熱は私水であつた。  
 主催が渡渡大金があつた。私達一つ連ひの従  
 兄は、いッルポライズをとつておた。  
 疎念疎念なから、この口シヤ洗は、今では全く記  
 憶してゐない。戦争がすむと、再び英流熱  
 記つて来たし、私は将来の方針から英流をか  
 わらされた。つたから、そのころには、二つ